プロレタリア通信

65号

2016年
1月1日

発行人　共産主義者同盟プロレタリア通信編集委員会
発行所　豊島文化社　〒171-0031
東京都豊島区目白2-18-15　目白コンコルド101
TEL&FAX 03-6328-9457
郵便振替口座　00110-0-773588
年間購読　発送費込　一〇〇〇円　一部　二〇〇円

年頭に当たって
世界革命の新地平を

北米帝・日本帝国主義打倒にむけて

世界資本主義・帝国主義は、この27年間大きく変った。

第一に、旧6大・7大帝国は、今や凋落の一途をたどり、新帝国主義としてBRICSなる5大帝国とインドネシア、イラン・トルコ、エジプト、サウジなどいわゆるイスラム圏諸国が遠からず世界市場におどりでるであろう。さらに、「アフリカ連合」もまた、2020年代後半には一大世界資源地域・世界市場に登場する。資本（商品）市場は地球はもとより宇宙の果てまでがその権益争奪の場所、覇権を競う場所となってきた。

第二に、資本（商品）のグローバリ化・全地球化は同時に国籍を持つ政治（軍事）の世界市場支配力の競争でもある。このことは、国境線の緊張と同時に空間・面としての地域の支配を巡る帝国主義間斗争でもある。労働者人民はこの帝国主義間競争に振りまわされないこと。協力しないこと。むしろ自国帝国主義打倒として国際連帯を強化しなければならない。

第三に、したがって、各国資本、ポンド、マルク、フラン、リラ、ルーブル、元やドル、円は、排外を国民に要求し、国内における社会排外主義を煽ることとなる。格差・差別は、新自由主義と同時にグローバル資本主義の下で社会排外主義を増長する。あるいは一体だと言っても良いであろう。国家に総括される市民社会は、労働者は全世界的にともに連帯し、団結しなければならない。

第四に、G7、あるいはG20の名で呼ばれる帝国主義的儀式は年に数回もたれている。そこでは、年がら年中「相互協調」が唱われる。つまり「相互協調」されないから、協調を強調しなければならないという訳である。それぞれ各国国内で排外と社会排外を資本・権力の力で生み出している。この国境外との「協調」と「国内の排外（差別）」は、「想定外」の事態を日常化させている。

2001年の9・11ニューヨークの二つのビルの崩落事故、2011年3・11の福島での原子核・核力発電の大爆発、2015年11月13日のパリでの多発ゲリラ斗争などなど。政治・軍事的に封じ込められた民衆の抵抗権・革命権は、都市ゲリラに止まらず、何時何処で公然たる蜂起に至るか想定外の時代となった。

我々は全く新たな「国際階級斗争の時代」を迎えた、と言うこと、したがって新しい「皮」「革」をも自ら生み出さなければならない。

我々は、「国際階級斗争」に寄与するために、従来の「労働組合運動」「地域、域域毎の自治・住民運動」「沖縄の自立・自己決定権運動」「アイヌ民族の権利回復運動（北方諸列島の権益を含む）」「しょうがい者を始め社会的格差・被差別者解放運動」を断乎として推進する。同時に、これまで社会変革運動の主流と必ずしも認めてこられなかった農漁林民、何よりも「男女性差」にもかかわらず「社会的格差・差別」をうけてきた人々の決起、その運動を共にたたかう。

以上のようなたたかいは、「一神教」と無縁の地平で展開されるのである。「イスラム教」「キリスト教」「天皇教」「黒田教」等々と無縁である、現にたたかわれている、労働者の、農民の、女性の、沖縄の、アイヌのたたかいを共にたたかうのである。架空の教説や説教・折状運動や上から目線は、スターリン主義であり黒寛主義であり、「マルクス・レーニン主義」なるものであった。同時に、「戦後民主主義」なるものでもあった。

安倍自公政権は、「軍産学一体」・成長戦略のマヤカシ。赤字国債によるバラマキ、「人からコンクリートへ！」と武器輸出と核発電輸出」。これがGDP600兆円の正体である。「共生・協調・循環型社会・エコロジカルな社会」に逆行。

安倍は、差別・排外社会、格差社会、弱肉強食の社会へ！　これこそ竹中平蔵・黒田東彦と安倍晋三の「富国強兵」路線である。これを強権（国権主義）で突破しようとするものである。この右派内閣は憲法改悪をもって国軍を創設すること、靖国をもって国民の血を清めようとするものである。このような右派政権を7月参議選と、それを待たずして大衆闘争をもって倒してゆかねばならない。

「世界資本主義・帝国主義」の新たな段階であることを踏まえ世界革命のあらたな地平を切り開かねばならない。

スローガン

①日米安保粉砕
②「安保法制」を廃案へ
③沖縄の自己決定権を断固支持・辺野古新基地建設粉砕
④再稼動反対―福島の原因と責任をとれ
⑤「安倍倒せ！」の合い言葉を高らかに

報告

一二・一二安倍たおせ！集会（反戦実）開かれる

旭 凡太郎

一二月一二日、「戦争法廃止　12・12安倍倒せ！　集会」と銘打った反戦実行委による集会が、千駄ヶ谷区民会館にて一八〇名が参加して行われた。集会は半田滋氏（東京新聞）の講演に続き専修大学辺野古ゼミ、沖縄一坪反戦地主会関東ブロック、再稼働阻止全国ネットワーク（伊方から）、フリーター全般労働組合等の報告が行われ、討論と続いた。

この反戦闘争実は幾度かの一週間にわたる国会前座り込み、3・21新宿デモ（四〇〇人）、六・二一集会、と独自の活動を追及した。8・30一二万人集会では国会議事堂前車道開放の一角を担った。

安保法制、戦争法撤廃闘争は九・一九国会通過後も毎月一九日の総がかり行動はじめ全国で続けられている。辺野古闘争はオール沖縄のもと、警視庁機動隊等権力の攻撃に抗し座り込み・工事阻止の闘いを続けている。原発闘争では伊方・八幡浜、高浜再稼働への現地闘争、テント防衛、金曜日行動の最中である。また非正規労働、ワーキングプアの争議が続いている。そうした闘いと連動しての安保法制の闘いである。

人民の怒りは直接には安倍の事実上のクーデタ、立憲主義の破壊という「暴走」によって加速させられている。がそうした立憲主義の破壊は戦争行為の本質でもある。戦争は世界と自国の土地、生命、生活を破壊するのみならず国家総動員、戒厳令、非常事態等国家権力至上主義と人権に対する優位、軍部支配、といった国家主義支配を伴う。

そして安倍の戦争国家化は、一方で日本帝国主義の資本輸出巨大化・海外権益拡大（と米帝衰退）の下での富国強兵策としてある。

他方ではそのグローバリズム・新自由主義労働支配のもとでの労働支配の劣化（非正規労働、ワーキングプア等）が進行している。あるいは原発巨大事故は巨大資本の資本蓄積至上・成長神話とトリクルダウンのドラスティックな瓦解であった。そして基地撤去、自己決定を掲げたオール沖縄の闘いは、日本帝国主義の侵略・日米同盟のための沖縄丸ごとの差別支配構造を突きくずさざるをえない。…こうした日本帝国主義の支配・統合力の著しい喪失ゆえに、排外主義、国家主義・富国強兵へ統合せんとする衝動を加速している。

こうした巨大な社会変革運動への地殻変動の始まりと、かつての総評労働運動等の敗北以降の数十年という現実の中に今日はある。

こうしたなか運動の後半を牽引したシールズは、「戦後民主主義を守れ」という枠にありつつも、派遣村、ワーキンプア、ヘイトスピーチ等の現実批判もあり流動的だ。ハンスト実等若い世代の登場、ユニオン等労働運動の発展、市民運動等と結合しつつ巨大な社会運動を闘いとるべき段階にある。反戦実のより広い層と結合すべき課題を集会は示した。

11・29医療観察法廃止！全国集会　報告

北村 裕

1　はじめに

11月29日に、心神喪失者等医療観察法（予防拘禁法）を許すな！　ネットワーク等、4団体の共催で、「11・29医療観察法廃止！　全国集会」が、行われた。集会は、2005年の「医療観察法」が施行されて以来、毎年行われてきており、全国から、当事者、精神医療関係者など106名が結集した。集会は、今までになく多くの仲間が参加して持たれた。

集会は、内田博文さん（神戸学院大学・教員）の講演、特別報告として、江端一起さん（前進友の会）、内田明さん（医療費扶助・人権ネットワーク）、全国各地の当事者よりのリレートークで進められた。

2　内田さんの講演

内田博文さんの講演は「再犯防止を掲げる刑事政策と医療観察法」のテーマで行われた。その中身は、今日問題となっている再犯防止を掲げる刑事政策と保安処分法としての医療観察法・精神保健福祉法を取り上げ、これらに対してどのように立ち向かっていくのかが話された。9月には、「平和安全法制関連2法案」、いわゆる「戦争法案」が成立し、多くの憲法学者から違憲法案という声があげられている。

戦時体制を支えるものとしては、治安強化、情報統制、思想統制が必要不可欠なものとしてある。再犯防止を支える刑事政策は、戦後直後に作られた新少年法が、戦前の旧少年法を継承して、少年に対する保護観察法を規定するものとして機能した。すなわち、この少年の保護観察が、戦後の日本の保護観察制度を牽引する役割を果たしてきたのである。少年法は、2000年、2007年、2008年、2014年に一部改正がなされてきている。

一方において、予防拘禁制度の復活は、1974年に法制審議会が、改正刑法草案を作成し、この中に「治療処分」と「禁絶処分」が新設された。しかしこれに対しては、法曹界や精神医療関係者などからの反対が多くあげられ、続いて1981年に法務省刑事局は、保安処分に関する修正案、いわゆる「刑事局案」を発表したが反対が多く、ひとまず保安処分の導入は見送られた。しかし、2001年6月に大阪の池田小学校で、児童に対する無差別殺傷事件が起きたのをきっ

かけに、与党はさっそく法整備に乗り出し、2002年3月に「心神喪失者等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律」案を閣議決定した。

この法案に対しても多くの反対意見が出されたが、2003年7月に強行採決により成立、公布され、2005年7月より施行された。こうして、従来の保護観察を利用した保安処分に加えて、新たに施設内での保安処分が制度化された。保護（パレンス・パトリエ）と再犯防止（ポリス・パワー）とが一体不可分なものとして制度化されているのは、極めて日本的といえる。

更生保護法は、2007年に制定され、2008年から施行されている。この法律は、それまでの「犯罪者予防更生法」と「執行猶予者保護観察法」を廃止し、一本化したものである。更生保護の目的は、改善か、再発防止かという論議もあるが、それらには「国民の理解」、とりわけ「犯罪被害者等の理解」も付け加えられたものとなっている。

2013年には、「刑法等の一部を改正する法律及び薬物使用等の罪を犯した者に対する刑の一部執行猶予に関する法律」が制定され、刑の一部を執行猶予することができることが可能となり、猶予の期間中、必要に応じて保護観察に付することが可能とされた。

最後に、これらに対応する戦略としての3つのアプローチがあげられた。

一番目は、「保安処分」批判という観点からの批判的アプローチ。精神障害者に限った保安処分は違憲であるというものである。二番目は、「医療法」という観点からの批判的アプローチ。これは、「治療」の概念の見直しが必要であり、「治療」のために社会生活のすべての面で犠牲を強いることでいいのかというものである。第三に、「差別禁止を含む患者の権利の保障」という観点からの批判的アプローチ。精神科医療では、患者の権利を著しく制限し、差別を逆に助長しているというものである。

これらを実現するためには「3本の矢」が必要となる。すなわち運動の担い手は、精神障害の当事者だけでなく、市民運動も不可欠であり、また、専門家の参加も見逃せない。

3　最後に―医療観察法の現在

医療観察法は、すでに10年を経過して、これまでに400名近くの人たちが対象となってきた。標準的な入院処遇の期間は、1年半とされていたにもかかわらず、年々長期化し、2014年には918日となり、約2割の人たちは1000日を超えていると思われるし、約1割の人たちは、退院や地域処遇のめどが立っていない、それには治療反応性の乏しさ、知的障害などの合併とかが予想される。また、一般の精神科病院に通い、作業所などに通院する人が、医療観察法の処遇修了者の60％ほどいるが、処遇開始以前の治療歴の6，7割の人たちも作業所に通い、精神科病院に通院していたという実態があり、この様に出口と入り口はほとんど変わっておらず、何のためにこの制度が実施されたのか、疑問である。さらに、入院、通院処遇の中での自殺者が40名以上出ているのは、徹底した管理と拘束を伴った強制医療に多くの問題があることを指摘することができる。

講演でも話されていたように、この制度は、今日のテロの危機、社会のリスクが強調される中で、治安管理の尖兵の役割を果たしている。この制度は直ちに廃止するしかない。ともに闘おう！

12・13三里塚―東峰現地行動

木根 輝雄

「成田空港『第三滑走路』計画を撤回せよ！　横堀現闘本部裁判勝利！　年間30万回飛行、飛行制限時間緩和を許さない！　反原発―再稼働やめろ！　沖縄・辺野古新基地建設反対！　TPP反対！」のスローガンを掲げ36名の労働者・市民結集の下、「三里塚―東峰現地行動」が行われた。現地行動ではまず、山崎宏さん提起の後、石井紀子さん、らっきょう工場・平野靖識さん、泉州沖に空港を作らせない住民連絡会の根本博さんらが発言にたち、デモへと出発。再び旧東峰出荷場跡に戻り交流会を行った。

2016年反対同盟旗開きに結集を！

主催：三里塚芝山連合空港反対同盟（世話人：柳川秀夫）

日時：2016年1月10日（日）、正午
場所：横堀農業研修センター（0479―78―0100／横堀農業研修センター　千葉県山武郡芝山町香山新田13）
参加費：1000円
連絡先：〒289―1601　千葉県山武郡芝山町香山新田90―5（案山子亭）／電話&FAX　0479―78―8101

■会場への行き方：
京成東成田駅地上　11時00分集合　迎えの車待機

09：13発　京成上野特急
←
10：21着　成田
←
10：32発　京成成田
←
乗り換え　京成本線（普通）［芝山千代田行き］
←
10：37着　東成田

韓国訪問記―初の外国旅行

佐藤　保

去年から始まった日韓労働者交流の韓国訪問団の一員として初めて韓国に行って来た。

当初は去年も行ったYさんが予定されていたのであるが、彼は今、四国の伊方原発の再稼働反対運動に最も忙しく、代わりに私が行く事になったのである。当初は韓国に行くのであるからハングルを少し位覚えなくてはと思っていたが、あの絵文字のような記号に恐れをなしてとうとう学ばずに終わってしまった。仕方ないので通訳の人に全面依存する事にした。

《羽田空港でのミス》

出発当日は午前9時45分発の大韓航空機（例のナッツ姫で有名になった航空会社）に乗るという事で2時間前の7時45分までに集合してほしいとの事だったので1時間半もあれば到着する予定であったが途中、何が起こるか判らないので5時過ぎに家を出た。3日前に浜松町駅の空港行き改札口で羽田線の時刻表をもらいに行っていたので、空港行きの電車が10分間隔で出ている事もあって予定通りの6時半には空港に着いてしまった。大韓航空機の搭乗口を確認して、空港職員にコンビニ店を聞き、パンと飲物を買って、皆が来るのを待った。7時45分には全員集合し、簡単な打合せを行って、9時45分には飛行機に乗る事を確認して散らばった。検問所に行ってみると閑散としており、焦る事はないと考え引き続き、近くの長椅子に座って9時過ぎまで待っていた。

もういいだろうと考え、検問所へ行った所、そこはさっきと違い長蛇の列でゴッタ返していた。並んだがこれが遅々として進んでいかない、9時15分になったら引率責任者から電話がかかってきて私一人だけが来ていないとの事で大いにあわてた。そこで、ゆっくり歩いている人の横を通って検問所の職員に急いでいる事を伝えたが、「規則なので」と言われ、そこに10分位待たされてやっと検問所を突破した。そこから飛行機の搭乗口までの何と長いことか、10分間早足で行ってやっと搭乗口に着き、皆を安心させた。

途中、検問所から少し入った所に食べ物を売っている店と長椅子があるではないか！次回からは、こんな失敗をしないよう早目に検問所をパスして、ここで休憩しようと思ったものでした。

《高所恐怖症》

20年以上前に沖縄に行って以来の飛行機なので、飛行機に馴れないのと高所恐怖症が重なって金浦空港に着くまでの2時間半、非常に憂鬱であった。飛行機がバラバラになって落ちないか、気が気でなかった。目の前の液晶画面に集中しようとするが何かと機内アナウンスに邪魔されて集中できなかった。でも、何とか無事に着陸する事ができた。

帰りの飛行機では液晶画面に慣れた事もあり外国映画を見て恐怖心をあまり抱かずにすんでよかった。

空港出口に着くと韓国側3名と通訳をして下さる日本人の出迎えを受けた。去年来たメンバーは半年振りとあってお互いに旧交を暖め合っていた。

ここから仁川まで地下鉄で移動するという。日本と違って切符を買うのではなく、専用カードを人数分購入し、降りる所で精算するというものだった。但し、出入口にはバーがあって、乗り越しの人間はバーが通れないようになっているようで、日本のカードのように画面に押しただけではバーは開かず、乗り越していない人間がそのままバーをおしていくと前に進めるようになっていた。一人だけ日本式にやって、立ち往生している人がいた。私自身は飲物を買う際に、ウォンは円の10分の1だと思わず、五百ウォンで三千五百ウォンの飲料を買おうとして失敗してしまった事もあった。

今、どのあたりを走っているのだろうと路線図を見てみると、ハングルの下に漢字、ローマ字などでも書かれているのでおおよそのことは判った。これで少し安心したものである。その後、迎えの乗用車に乗ってからもローマ字を探して何て書かれているのか知ろうとしたものである。

《宿舎は戦前、日本人が住んでいた家を改築したものだった》

去年、来たメンバーが泊まったのは市内のホテルだったそうですが、今回は韓国側の人が探してくれた所だった。ここの御主人は流暢な日本語を話し、職業は教員をやっている人だった。奥さんはハングルしかできないのでOさん夫婦が通訳してくれた。朝食付きでとり肉、出汁などで作ったおかゆだったがとてもおいしかった。

《名物タッカンジョン、ジャージャー麺》

宿舎に荷物を置いて、今日の目的は「聖母病院闘争のハンスト」現場に行き、エールを交換する事だが、「昼食はまだでしょう」との韓国側の配慮で近くの市場に行った。そこはいかにも下町といった風情で小さな店がいくつも並んでいる所だった。

港が近いので自然と出来たものだった。その中の一軒に案内された。店の前には多くの人が列を作ってとり唐揚を買い求めていた。この店は有名らしく、一人で2～3ケの紙袋を手に持って帰って行った。この店はとり唐揚の専門店で甘辛のタレがかかっている物とかかっていない物の二

ビデオ学習会　シリーズ第4回

731部隊員の証言

2016年2月20日（土）

午後1時30分～5時00分（1時10分開場）

会場：港勤労福祉会館1階第1洋室

731部隊関連資料の情報公開裁判の傍聴支援を！

第10回　2016年1月22日（金）

16：00～

東京地裁419号法廷

種類しか売っていない。唐辛子の量が多く、非常に辛かった一方、甘みも強く黒砂糖ではなく蜂蜜を使っており、漢方薬も入っているらしいとのことだった。鶏肉を高温の油で揚げて、日本のうなぎのタレと同じく、大きなツボに入ったタレの中にその唐揚したヤツを入れて大皿に盛りつけたものが出て来た。油で揚げた物なのでなかなか熱いままで、一つ食べるにも熱いし辛いし苦労した。韓国の人はそれを平気で食べるから驚きである。

ジャージャー麺について

もう一つジャージャー麺についても書いておこう。韓国の現代ドラマを見ていると、このジャージャー麺を食べるシーンがよく出て来る。日本のラーメンのように国民食であるとの事だった。そこで最終日の昼にジャージャー麺のおいしい店に案内してもらった。日曜日ですごく混んでいて、店側と交渉して一つの個室へ案内された。どんな物か食べてみると甘いばかりで拍子抜けした。

実は、この味付けは子供用となっていて、大人はその中にキムチなどを入れて好みの味にして食べるとの事だった。出て来たキムチはやはりかなり辛いが、ジャージャー麺の中に入れると味がまろやかになった。韓国側の人は皆、ジャージャー麺ではなく「ちゃんぽん」を頼んでいて、我々にもすすめてくれたのだが、「一口食べてみて」といったのを他の人が食べたのだが、非常に辛く水を幾杯もガブ飲みしていた。名前は同じだが長崎ちゃんぽんとはまるで違っていて頼まなくてよかったと思ったものである。

《聖母病院、解雇撤回闘争》

タッカンジョンをタラ腹食べた後、韓国側の人の乗用車でハンストをやっている聖母病院へ行った。午後4時を少し回っていたが、途中で道端に車を停め、坂道を少し歩くとハンストしている場所があった。その上には聖母病院があり、歩いて降りて来る人に出会った。この日、ハンスト者は6人であった。来意を告げ、日本から持ってきた〝激布〟を手渡して皆で記念写真を撮った。そのあと責任者の人が概要を話して下さった。

事の発端は、病院側が保険患者数の水増しをして不当に利益を得ている事を知った退職した労働者が告発した事だった。（日本でも病院の水増し請求はよく暴かれている）これを外部に洩らしたのは組合だとして支部長に対して集団的いじめをした、その結果、支部長は精神病になり病院の前で倒れるまでに悪化させられた。

聖母病院は元々、朝鮮戦争で孤児となった人や弱者の為に設立され庶民の味方となってきていた。ところが10年前にカソリック教区が経営に乗り出してから、その精神とは相容れない〝金もうけ経営〟をやってきていた。その結果、病院の規模も職員数も3倍になったが反対に〝勤労基準法〟さえ守られず労働者への人権弾圧もひどくて250人いた組合員も今では11人しか残っていない。カソリックの信者が多い韓国では教会に逆らう事は難しい！！　そこで上部団体の病院労組や韓国労組が市民を巻き込んで支援に立ち上がった。朝から夕方までローテーションを組んで取り組んでいるとの事で、訪問した日はハンストに立ち上がって43日目との事で日数が大きく張られていた。

経産省前テントと同じ事をやっているんだなと思った。

外でマットレスを敷いただけのスペースでこれから冬に向かって寒さがますます厳しさを増していくので、身体には気をつけてもらいたいと思った。話を聞いている間に暗くなってきたので、そこを後にした。　（次号につづく）

大韓民国　朴槿恵大統領　殿
駐日大韓民国大使　柳興洙（ユ・フンス）殿

抗　議　文

12月10日、朴槿恵政権が、民主労総のハン・サンギュン委員長を、全く不当にも逮捕したことを強く抗議する。

朴槿恵政権は、ハン・サンギュン委員長が11月14日の民衆総決起大会はじめ4月以降の一連の街頭行動を指導したとして、騒擾罪の適用を検討するという。

これは、労働改悪を強行する朴槿恵政権に対してゼネストで対決している民主労総への弾圧であると共に、民主主義を破壊し、民衆の生活を破壊している朴槿恵政権の退陣を求めている韓国の民衆運動そのものを圧殺しようとする弾圧である。

12月16日、民主労総は、政府推計でも現代、起亜、韓国GMの自動車メーカーを含めた7万4人が参加するゼネストを成功させた。しかし朴槿恵政権は、労働者の生死を決する労働改悪に反対するゼネストに対して違法ストとして今後更に弾圧を行うことを明らかにしている。

朴槿恵政権は、11月14日の民衆総決起大会を不法暴力デモと非難した。

しかしその根本的原因は、光化門と大統領府近くに申告した集会をすべて禁止し、その周辺一帯を巨大な車の壁を設置して、交通を遮断し源泉封鎖したことだ。それによって民衆総決起大会はもちろん、市民の通行さえ妨害した。更にこれに抗議する集会参加者には、無差別にカプサイシンの入った高圧の放水銃を、長時間膨大な量を乱射し、多くのけが人を出した。これにより500名以上の市民が水泡など重大な皮膚炎などを発症している。また50名の市民が連行されている。

集会とデモの自由は憲法が保障した市民の権利だ。憲法裁判所は警察の設置した車の壁は違憲であると判決している。

この過程で、カトリック農民会のペク・ナムギさんが、高圧の放水銃に至近距離から直撃され転倒し、意識不明の重体に陥った。現在も意識が回復していない。

集会現場にただ素手で、立っていただけなのに、高圧の放水銃で至近距離から直撃され転倒し、今も昏睡状態である。至近距離からの直撃は、放水銃の取り扱い規則に違反する違法なものである。放水銃の威力を知りながら無抵抗の一人の農民を危篤に陥らせたのだから未必故意による殺人未遂だ。

また、集会後警察は、公企業と民間企業に公文を送り集会参加者の情報収集をはかり、1531名を捜査対象に上げ、そのうち現在までに731名を捜査している。

また、民主労総本部事務室と産別地域組織事務室など8か所を押収捜索して、デモと関連のない物品をあたかもデモで使われた物品だとして展示公開し世論の歪曲をしている。

更に朴槿恵政権与党セヌリ党は、催涙液を防ごうと一部集会参加者がマスクや覆面をしていることを捉えて、デモ参加者を「テロリスト」に例え、テロ関連法案と絡めてIS（イスラム国）のように顔を隠す覆面デモをできないよう、に覆面デモ禁止法を作らなければならないと主張している。これではまるで軍事独裁政権時代にもどったようだ。

我々は、労働者の国際連帯の立場から、民主労総を始めとする韓国民衆への弾圧に強く反対し、12・16ゼネストをはじめとする民主労総の闘いを断固支持するものである。

以上の立場から、重ねて民主労総を始めとする韓国民衆運動への弾圧に強く抗議し、下記のことを強く求める。

1、民主労総への弾圧を中止し、ハン・サンギュン委員長を釈放すること
1、放水銃の直撃で、重体に陥っているペク・ナンギさんの事態に対して、真相を究明し、謝罪すること。責任者を処罰し、再発防止を約束すること

2015年12月
賛同：労働組合／市民団体

廣澤一男さんを追悼する

北村 裕

共産主義者同盟首都圏委員会の廣澤さんが、12月12日の深夜に亡くなった。享年69歳、当然だが、死を迎えるにはまだまだ早い年齢である。

まだやり残したことも、たくさんあったに違いないし、革命運動に自らを捧げる人生は、まだまだ続くと思っていたに違いないし、何よりも周囲は彼に大きな期待をかけていたに違いないのだから。それを考えると、彼の周囲にいたものの一人として、残念でならない。それ以上に、本人の想いはそんな言葉では言い表しようのないものがあったに違いない。

２０１１年以降今日まで僕たちの周りで起こっている状況は、再び激動する時代のときめきをしっかりと僕たちに告げているので、彼もまた、聞いていたに違いない。

今頃彼は、一足先に飛び立った向こうの世界で、今は穏やかな面持ちで、僕たちのなすことを眺めているのだろう。

僕自身は彼を知ってからは、まだそんなに月日がたっていないような気がする。

１９９０年代の半ばだったような気がする。ある日、一緒に会議に参加していたとき、そこに彼がいて、以降彼と行動を共にすることが多くなった。

彼はどんな場面においても、落ち着いていて、自分の意見を伝え、それと共に、全体をまとめて、いろいろな集まりの推進力となっていた。

「共産主義運動年誌」から、「共産主義者協議会」、「反戦実行委員会」、これから僕たちは新しい枠組みで、新たな運動を展開していくこの時に、彼は一足先にいなくなってしまった。

僕たちは、この世でいろいろなことをしながら格闘し、まだしばらくは生きながらえていくしかないので、一足先に旅立たれた廣澤さんには、もう少し待っていてください、と言いたいです

今は、廣澤さんの死を、静かに追悼したいと思います。長いこと、お疲れさまでした。合掌。

廣澤さん、はやすぎますよ

あちら、こちらへの連絡とてもつらく、心苦しかった。

12月12日　早朝「廣澤一男が午前1時亡くなった。プロ通関係者に連絡して下さい」、「詳細は追って連絡します」と。

ええ……と、思うまもなく電話は切れた。あわててホウボウに連絡を入れ、少し間を置いて約50年来の共通の友人たちにもと、9時すぎ電話を手にした。

とりあえず齋藤さん、桝本さんに電話、そして桝本さんから幾人かに連絡していただくこととした。

廣澤一男さんは、フトコロの広さ、深さにおいては人後におちない。こまった時の「廣澤さん頼み」というのが、「マルクスアンドラジカリズム研究会」（ＭＲ研）、そして『共産主義運動年誌』結成時など、必ず、私は廣澤さんに意見を聞いてことをすすめてきた。このことは、中村丈夫先生も広松渉先生も認めるところではなかったか、と思う。

１９８０年代後半から１９９０年代廣澤一男さんの尽力なしには、「Ｍ・Ｒ研」も『年誌』もかくも長期に継続することは困難であったであろう。たしかに、表面で派手に振る舞うことはなかった。

前面でアジティーションをするわけでも、デモ行進の指揮をとるわけでもなかった。人々をシッタゲレイし号令をかけるでもなかった。

だがしかし、廣澤一男さんは、「そこに存在している」のみでその座を、その場所・空間をナゴマセル。トゲトゲシイ議論の席上であってさえ、廣澤一男さんの司会・議事進行は、それを中和する不可思議な存在感をカモシ出していた。

その存在感はバツグンであった。

彼が永眠したのは、12日午前1時とのこと。

その数時間前、つまり、11日の夕刻までは「元気になって、必ず現場に立つ…。」と、現場にこだわりつづけた生涯であった。現場、すなわち、常に人々に寄り添うこと、人々と共にありたいと希いつづけた生涯であったと。そのような情熱・パストを死の直前までもちつづけたその精神力においても希有の革命家であり、同時に政治家でもあったと。

廣澤一男の通夜・告別式の一斉は、その姉弟・親戚一同とともに、生涯の友人たち、後輩たちの手によって執りおこなわれた。

葬儀委員長を始め廣澤一男の仲間たちが一斉をとどこうりなく執りおこなった。ここに、彼・廣澤一男の人柄が偲ばれるのである。

２０１５年12月17日

佐藤 秋雄

MR研究会の開催

MR研究会（マルキシズム＆ラディカリズム研究会）は、1991年4月に発足し、今年で24年を迎えている。マルクス主義の現代的検証と、政治・社会運動という実践のレベルにおけるラディカルな運動のイデオロギーの探求という問題意識を掲げて、これまで活動してきている。この意味で言うなら、今日ますますその存在意義が問われていると考えられる。

今年は、日米新ガイドラインの改定と安保関連法が成立し、新日米安保が姿を現したが、これに対抗する東アジア像、戦略はどのようなものなのか？

第22期のフォーラムの統一テーマは、「東アジア政治と変革」というもので、2016年1月23日（土）に第1回を開催する。今回は、「アメリカの東アジア戦略と安保法制―オフショア・バランシングとしてのリバランス―」を検討対象としている。

講師：**大賀哲**さん（九州大学・教員）

日時：**2016年1月23日（土）** 午後２時から５時

場所：**目黒区民センター**社会教育館第２研修室（７階）
JR目黒駅西口から、徒歩10分

『共産主義運動年誌』
第16号　2015年
好評発売中

特集 胸像の除幕式

金城あゆみこと嶺井妙美

佐藤 秋雄

金城あゆみ　こと嶺井妙美のブロンズ像の除幕式が12月10日、玉城の嶺井家門中墓であった。

製作者　金城実氏は、ご夫人同伴で出席し「一活動家の胸像を製作したのは始めてだ、しかも、依頼されたわけではなくである。それは、夫人の申し出である」と。

金城実夫人は、とても嶺井妙美に好意を寄せていたこと、屋良朝苗さんやら瀬長亀次郎さんやら安里さんやらではなく、なぜ、嶺井妙美なのか、それは、嶺井妙美が沖縄・琉球の人々に限りなく寄り添い沖縄・琉球の自決・自己決定にこだわりつづけたからだ、と。

ブロンズ胸像には、タスキをかけたニコヤカなとても可愛い嶺井妙美が、しかし、その口元はへの字に曲げ上口歯でギューと下口ビルをかむという、意志の強さを実に良く表現した表情となっている。このタスキに「沖縄の自決権の確立」が彫られている。ここには金城実さん夫妻の想い、金城夫妻の決意をもみてとることができるのである。

嶺井妙美のニコヤカなとても可愛いと同時に、この口元の意志の現し方、ここに彫像家金城実さんの表現者としての表現力とその意志を私は読み取ったのである。

しかも、その設置場所は、嶺井家の門中墓とは言え、百十踏揚りの墓のトナリである。この地に3度も足を運び、設置の場所の選定、何処に、どの方向に向けて設置するのか、設置すべき、大地、台座はどうするか、

超多忙な芸術家である金城実さんが3度も足を運び決定したのは、玉城（現南城市）陸上競技場・駐車場から石段を上り切った正面、嶺井家門中墓の前、そして巨大な一枚岩の中頃で、西方向・マブニを見下せる方角として台座を設け、このコンクリート手作りの台座の上にブロンズの胸像を設置した。

実に考え抜かれた設置である。

ここにも、嶺井妙美の遺族と金城実さんの将来を見透えた方法を読みとることができる。

読者の皆様方には、マブニへの行き帰りのいづれかにでも是非玉城は富里（ふさと）にたちよっていただきたい。沖縄・琉球の歴史の一コマとして記憶にとどめていただきたい。

玉城の成りたち、その史跡は於砦　奎にゆずる。

故嶺井妙美　三回忌および妙美胸像除幕式のおしらせ

故嶺井妙美の三回忌および除幕式を下記のとおり行うこととなりました。

つきましては、皆様には除幕式にご参加いただきますようお願い申し上げます。

お香典やお心遣いは無用ですので、普段着でお越し下さい。

家族一同お待ちしております。

1．三回忌について

日時　2015年12月10日（木）10：00～

場所　大里メモリアルパーク

2．嶺井妙美胸像除幕式について

日時　2015年12月10日（木）14：00～

場所　南城市富里（ふさと）南城市陸上競技場の横　嶺井家の墓

尚、②除幕式参加者は、金城実夫妻、山口泉、武石和美、船橋、大池さん・宮城さん、嶺井家、関東から3名

尚、③「ブロンズ・銅にはナマリが入っている。それ故、2～3年後には、シリコンゴム（透明）で全体像を塗バクしてくれ」と金城実さん、木田明夫さんが、自分が必ずやると約束

碑文

嶺井　妙美

（1949～2013）

沖縄に生を生けた

嶺井妙美は学生時代を東京で送り社会運動に目覚めた。

沖縄日雇労働組合を結成しホームレス支援を始め、生涯を地元沖縄に根ざした活動をした。

このモニュメントは、彫刻家金城実の妻 初子さんの声かけにより実現した。

2015・12・10

製作　金城　実

碑文　嶺井　千恵美

尚、①嶺井妙美は、玉城富里（ふさと）に生れ5才まで、6才から浦添屋祖、東京時代を除き、那覇市内に数年、後は宜野湾市は我如古で生涯をすごす。

御礼状

本日は、嶺井妙美の三回忌および除幕式にご出席いただきまして、ありがとうございました。

嶺井妙美の遺品のなかに、30歳代前半に書いたと思われる手書きの詩と文章がありました。今回皆様に、故人を偲ぶよすがにでもなるかと思い、活字にしてみました。

どうぞ、皆様におかれましては、お身体を大切に、今後のご活躍を心から応援しております。

2015年12月10日

（1949年（昭和24年）生れ）（2013年12月10日　64歳で没）遺族一同

海と空と私

1982年

嶺井妙美

海には、海のやさしさがあり
空には、空のやさしさがある
私には、私のやさしさがある

海には、海の悲しさがあり
空には、空の悲しさがあり
私には、私の悲しさがある

海には、海の怒りがあり
空には、空の怒りがあり
私には、私の怒りがある

海には、海のほほえみがあり
空には、空のほほえみがあり
私には、私のほほえみがある

海には、かけまわる魚たちがあるように
空には、はばたく雲があるように
私には、やさしい同志たちがある

怒り、悲しさ、ほほえみ
やさしさの中から私は出発する

あなたへの唄

1982年

嶺井妙美

貴女の心は、夜の海のように
閉じている
あたりの静けさの中で
波しぶきを放つ者のみが聞こえる
それが、貴女の心

気負いとプライド
何と抑圧された足跡よ！
それは、暗く恐怖に苛まれて
しまった
夜の海のように閉じている
ひとりで閉ざした心

だから、行くがいい　さがすがいい
砂辺の岸で、砂をやさしく握りしめ唄うがいい
寄せては返し、また寄せては返す
沈黙の海と語るがいい

このとどめのない自然の摂理が
長い暗い時間に苛まれても
あのきらきらとした昼の海なのだということを！

閉ざした夜の海のような心
それは、自分が創りだした夜の海

気負わず、プライドを捨て
無心に砂辺で汗を流す人たちに
混じり歩けよ

海にも朝やけがあるように
あなたの朝やけが
潮風なびく海で発見できるのです

無題

嶺井妙美

端初…
何と長く耐えてきたことか

端初…
それでも、今確かな手応えに
私の心は踊る

ああ…
いくたびかこの道の方向で
倒れし人々のありしか

戦いは未だ端初であり
険しく、道は遠いけれど

今出くわした同志たちと
さあ、友よ！　戦闘準備だ

加盟にあたって

1984・7・7　七夕の日

特に意識してこの日に決意したわけでもないのです。ずーと以前から私なりに思考し通しで……。しかし沖縄独自の云々……という歴史の重さから脱し切れず、長い道のりを歩いてきたようにも思います。

歴史の重さには、沖縄人の苦悩と怒り、悲しみ、あわれみ、嘆き等々負の要因が彫刻されていて、それがとても潜在意識として感知できるほど脈々と鼓動を打って奥深く流れているのです。この流れが沖縄人を形成し、沖縄人の階級意識の底流であり、これが端初なのでしょう。

この端初は、とても大切で、かけがえのない沖縄人の魂なのです。この端初の無い奴が心を失った独占資本家と天皇で、それを否定しようとするのが沖縄を捉えることが出来ない革マル派や中核派を筆頭としたエセ左翼等々です。

はっきり言って、決意するまでは、日本や日本人に心、魂を売ってしまうような恐ろしい気持ちに苛まれて、あらゆる組織や個人とケンカしてきたようにも思います。活動を始めて15年余、ふりかえると何をしてきたのだろうとも時々考えます。しかし決意していくことがこんなにスッキリした気持ちで行けること……今が端初であるのですが、この端初に対する私なりの決意を固くかみしめています。

さて……。

私のあまりにもぜいたくな部屋の片隅にパレスチナの子供の写真があります。幾たびも戦渦をくぐってきたであろう、マフラーをかぶって何か言いたげなうるわしいような、悲しいような奥深とした目……。その視線がいつも私の心を突き刺しており、私はつねにそれに心を引き寄せられています。パレスチナの様々な写真の中で私はこの一枚がとても気に入っています。

私は、子供の未来を阻む全ての悪の一切をたち切り、ペガサスのように子供たちが自由奔放に飛び回れる世界……。火の鳥を追い求める様はロマンだと嘲笑されようと、私はこのロマンを確かな現実のものにしていきたい。パレスチナの子供たちも朝鮮、ラテンアメリカ、沖縄の子供たちもきっと心を解放してくれると思います。

今、共同保育がかかえている困難の前にホトホトあいそをつかしたりすることも大いにあるのだが、私は子供たちがとても好きなのです。それは、子供が沖縄を喚起せる原動力になると考えているからです。沖縄の民族解放闘争も子供たちの力を大いに借りたいし、共に教育を創造したいと考えている。民族の文化は子供が大人に伝えていくし、子供は純粋に民族解放をうたい体現していくからです。共同保育の原点もそこにあり、そこに生き続けている。

私の戦いは、今端初であり、始まったばかりです。決意した後、星を大いに見た。広い視野にたてば、全体を見渡せることを痛感した。広い視野とは多分、プロレタリア国際主義（路線）を指すのだろう。世界のどの場所からも見ることができる星を見ている私たちの思いと点在している場所がつなげたら、それはとてもすばらしいと思う。つなぎ目をかみあわせる仕事はとても労苦を要する。この労苦を共に背負い生きてみたいと思う。

この決意を促したもの、それは、鉄の戦線6号であり蜂起派の総路線である。今の位置（沖縄の地）を基点に先ず出発したい。

１９６８年頃からの活動、帰沖後は「人民救援会」を組織して活動する。

嶺井妙美　秘めたる決意

「そして加盟にさいして」

評注　佐藤秋雄

私は、嶺井妙美と最も近しく、親しく政治活動を共にしてきたと自負している。

しかし、「加盟にあたって」一九八四・七・七・七夕の日なる文章上の「……今が端初であるのですが、この端初に対する私なりの決意を固くかみしめています。」

そして、この決意表明の最終章・段落で「私の戦いは、今端初であり、始ったばかりです。決意した後、星を大いに見た。」と、

さらに、この文章全体の結語は、「この決意を促したもの、それは鉄の戦線6号であり、蜂起派の総路線である。今の位置」（沖縄の地）を基点に先ず出発したい。」と、

この文章の脈略からは、共産主義者同盟・鉄の戦線派・蜂起派への加盟を意味している。

だがしかし、金城あゆみこと嶺井妙美は、同時に「沖縄民族」ということば、「沖縄の自決権」についてのべている。ということは、鉄の戦線・蜂起派の当時の論文執筆者は、さらぎ徳二こと右田昌人である。

さらぎ徳二は当時すでに、沖縄・琉球の独自の文化・独自の政治と歴史を認めていた。

さらぎ徳二の日本共産党所感派としての総括の一つでもある。『鉄の戦線』6号は、どなたでも現在も眼にすることはできるであろう。

さて、私は、嶺井妙美と一九八〇年十一月以降少なくも4ケ月に一度は、一九八七年の海邦国体までは会っている。一九八七年六月二一日沖縄日雇労働組合は結成される。

この沖縄日雇労働組合の初代委員長は上江洲健である。上江洲健は『鉄の戦線』・『蜂起』派の優秀な活動家であった。沖縄大学の活動家でもあり、一九八七年海邦国体天皇訪沖・来沖反対斗争の先頭でたたかった。集会場獲保、公園の借うけ、デモと集会の届出、デモコースの申請、そして車輌の運転など、八面六臂の活躍であった。

かかる、上江洲健が「党内」・セクト蜂起派内でどのような処遇を受けていたかは定かでない。しかし、だから

と言って嶺井妙美が「鉄の戦線」・「蜂起」派に加盟したとは聞かない。

私は、当時開南にあった嶺井妙美経営の「沖縄舎」なる書籍販売店舗内などで彼女と議論した。その際、共産主義者党の一元支配・中央集権主義の不合理を力説した。コミンテルン→コミンフォルなるものの誤り、日本共産党の台湾や沖縄、とりわけ、戦前戦後直後の在日諸国人民への日本共産党の党員に対する方針は間違いであったことを力説した。

勿論、一九八二年段階でも高見沢洋一は、嶺井妙美さんにむかって「世界革命戦争」「革命戦争」と「共産主義者同盟沖縄支部」⇩「プロ独でつなぐ日沖プロ独」みたいな話しである。私は、「民族」なる概念を認める以上「日本プロ独（アイヌも沖縄も）」は、間違いであると考えていた。そのような観点から嶺井妙美と開南の「沖縄舎」で語らった。

嶺井妙美は、誰れよりも早く、一九八三年六・二三慰霊の日に、各県遺族会が「日の丸行進」をする。この「日の丸行進」のみはやめて下さい！　と。ひめゆりのガマ前から各県遺族会によびかけたのである。暴力・暴行を覚悟の決死のよびかけであった。

私は、この一九八三年六・二三糸満市役所から、ひめゆりのガマまでの六キロ弱のデモ行進と遺族会の怒りを買うであろうよびかけを忘れることはできない。何年かのちには、この「人民救援会」嶺井妙美たちのよびかけはカトリツク系ボーイ・スカウト・ガール・スカウトそして、ヤマトから参加する「反天皇制運動」の人々に受け入れられた。

このような経過を知り、体験している私は、嶺井妙美が「加盟」したのは自ら立ち上げた「沖縄解放同盟」であろう。その当初「革命的沖縄解放同盟」の旗とチラシを作製した。私は「革命的」はとるべきであること、2点目は、一九七五年時の「沖縄解放同盟」の友人諸君に一言伝えることを〝進言〟した。

「一九八四・七・七・七夕の日」なる結語の決意は、さらぎ徳二の総路線の承認、その内にある「民族自決権」に共鳴したこと、この共鳴は、一九七九年ごろから活動し、モンモンとしてきた心の闇が晴れたこと、もはや前に進むしかないこと。どんな困難がたちはだからろうと不退転の決意であること、これが、「結語」であり、「端初」なる〝うた〟詩である。

嶺井妙美とは意志の人であったこと、嶺井妙美は何があっても弱音をはかなかった。

「沖縄日雇労働組合」は「全国日雇労働組合協議会」にただの一度も加盟していない。理由は「『全協』と兄弟であっても支部ではない！」と。この事を見ても、嶺井妙美がヤマトの一セクトに加盟したとは思えない。

嶺井妙美は沖縄・琉球の人民の子供として「自決」を掲げつづけた。

『プロレタリア通信』57号（二〇一四年一月二八日）を再録する

金城あゆみさん聞き書き
沖縄人民自決の旗を掲げて

私の親しい友人二人が全く突然のごとく亡くなられた。

川音勉（畑中文治）は、二〇一三年八月三日、六〇歳の若さである。

畑中とは、一九九〇年代各種研究会で、「フォーラム9年代（F90S）」で、そして、一九九五年沖縄での米軍海兵隊兵による「少女暴行事件糾弾闘争」では行動を共にした。言うまでもなく、一九八三年三月八日の「三里塚芝山連合空港反対同盟」の分裂に際しても、農民の圧倒的多数派であった熱田一を代表とする「三里塚芝山連合空港反対同盟」を支持し行動を共にしてきたのである。

加えて、共産主義運動の再興・共産主義者の結集と団結として「マルクスアンドラジカリズム（M&R）研究会」に始まって『共産主義運動年誌』編集委員会……「年誌」なる命名も畑中の提案である。

そして二〇〇八年一二月の「共産主義者同盟結成五〇年：大政治集会」に対する「よびかけ文」を起草した。この「よびかけ文」は翌年一月の「共産主義者協議会」：『赤いプロレタリア』となったのである。

将に、世界党・世界革命に向けてその第一歩を刻印させたその人格を喪った。その痛では計り知れない。この私の悲しみは当分、否、一生癒えることはないであろう。

嶺井妙美（金城あゆみ）は二〇一三年一二月一〇日午前一〇時五〇分頃没。六四歳であった。

嶺井は、一二月一〇日早朝より、首里大中町の「沖縄日産労働組合」事務所と宿舎の畳の総入れ替えをしていた。そして、二棟目の畳の入れ替えを終えたところで倒れる。一〇時一〇分頃である。救急車にて那覇市民病院で一一時には死亡を確認される。

私は「沖縄日産労働組合」事務所へ、泉崎のお姉様宅へそして南城市大里メモリアルパークへ、初七日を済ませてきた。

辺野古で、東村は高江で、具志川市は、カネカダンで、それぞれ旧知の友人たちに嶺井妙美の死と哀悼の意を伝えてきた。

一二月一六日、国際通り裏手の居酒屋でこれまた旧知の知念功氏としたたかに、深夜まで痛飲した。

嶺井とは、一九八〇年九月アイヌモシリは、ノッカコプレイチャルパで、アイヌと出会ったことから沖縄へも是非と思いたち、一一月那覇行きを決行。

（株）大地の後輩やらその他の人たちの紹介で嶺井妙美と出会った。

嶺井と最後に言葉を交わしたのは八月三日である。

八月三日は福島県いわき市におり、川音勉の通夜に出席できず、嶺井妙美に上京を促した。川音勉の告別式参列を促したのであった。

嶺井もまた、闘病中であり「ニトログリセリン」をかかえた生活であったため、弔電を！　と。

嶺井妙美との最後の会話は川音勉追悼の弔電をめぐってであった。

ここに両名を追悼し、深い悲しみと共につつしんで哀悼の意を表します。

二〇一四年一月二〇日
羽山　太郎

川音勉、嶺井妙美の会話が記録されている。

月刊雑誌『情況』２０１２年7月・8月合併号
金城あゆみさん聞き書き
沖縄人民自決の旗を掲げて

金城あゆみ（沖日労）
［聞き手］川音　勉（沖縄連帯講座）
Ｔｓｕｔｏｍｕ　沖縄連帯講座）

【シリーズ】時代の転換を沖縄に聴く―苛政に育つ琉球弧の自己決定権

金城あゆみさん聞き書き

沖縄人民自決の旗を掲げ続けて

金城あゆみ（ＫＩＮＪＹＯ Ａｙｕｍｉ 沖日労）［聞き手］川音勉（ＫＡＷＡＯＴＯ

はじめに―メッセージ

二〇一二年七月二一日、「オスプレイ反対！」の怒号が県庁前・県民広場にこだました。沖縄民衆の怒りが爆発している。

「軍事基地は沖縄にもアジアにも世界のどこにもいらない！」日本・アジア・全世界を貫いて、米帝国主義とこれに追随する「日本」政府、韓国を糾弾する沖縄民衆の声だ。その願いは、反安保、反核、反原子力であり、その勢いは拡大の一途をたどり、米帝国主義と野田政権に刃を突き付けている。

私は三〇数年前、戒厳令下の「光州」に入り、公安の尾行の中で、民衆蜂起の跡をたどりながら、沖縄と比べて韓国―大陸は何と広いことかと思った。他方で、沖縄に核をもってくるのは権力の意識からして「当然だなあ」と考え込まされてしまった。広い太平洋の小さな島に「悲劇」は押しつけられる。「不沈空母」沖縄は基地だらけであり、「基地も核もない沖縄の返還」は、「沖縄併合」の事実をゆがめた、社共勢力―「左」からの幻想の産物であった。「右」自民党の「返還」の時の万歳三唱は、米帝国主義と密着し、日本帝国主義の権益拡大を宣言したものだ。ベトナム戦争の泥沼化の中で、米帝国主義は、「苦悩の選択」として「核付き、沖縄返還」を強行した。そしてそれにともない日本軍＝自衛隊の沖縄派兵＝常駐化が実行された。さらにそれは、米帝国主義の後押しを受けて、今や「与那国陸上自衛隊基地建設」、「尖閣領有宣言」として、東アジアにおける日本帝国主義の政治的経済的支配の拡大をもくろんでいる今日の姿がある。

中国、沖縄、台湾、フィリピンの漁民が、共有する海域に国境線を引くのはいったい誰か？！　今、世界は流動化し、小さな火花が、フランスで、イギリスで、韓国で、アフリカ諸国で、そして日本―沖縄で、燃え広がっている。手をつなぎ、団結し帝国主義を打倒しよう（金城あゆみ）。

現在に到る活動の以前―五〇～六〇年代の経験

―学生として東京にいらっしゃる以前、五〇年代から六〇年代を沖縄で過ごされているわけですから、その頃の思い出を、はじめにお聞きします。六〇年代の復帰協結成、ベトナム戦争の激化、六七年には教公二法闘争など、七〇年に向かって沖縄社会も大きく揺れていたことと思います。

金城　高校生の時、どこの大学の出身の人かは忘れてしまったけれど、女性の先生が四～五〇人のクラスの生徒に沖縄問題について話しながら、学生運動についての意見を聞いたことがありました。この先生自身、学生運動や教職員会の活動をしていたのでしょうね。新鮮な印象がありました。高校時代は社会運動についてはそのくらいの思い出しかなくて、夏休みになるともっぱらアルバイト、商売が好きでした。母親が婦人会の活動をしていて、その影響もあって、物品販売などやりました。子どもながら、タイルクリーナーとか、洗剤を売って一日五ドルも稼いだこともあった。あのころでは、大人の日給の二、三倍、大金でした。中学、高校は浦添。歴史が好きで、教職員会の活動に影響を受けました。

六〇年、アイゼンハワーが来たときは小学生だった。教職員に連れられて、日の丸をもたされて、アイク歓迎ということで丘のうえに集められ、日の丸を振らされた。

東京経験

―東京に出ていらしたのは何年でしたか？

金城　六九年三月です。ちょうど東大安田講堂占拠闘争が終わったころです。三月の高校卒業式の後、すぐに東京に行き、新宿の予備校に入りました。新宿駅西口の地下広場で、毎週土曜日、フォークゲリラがうたっていて、予備校の帰りにそれをいつも聞いていた。当時住んでいたのは、中野区の下落合。街頭闘争で、電車が止まって、下宿まで西武新宿線に沿って、歩いて帰ったこともありました。

浪人して、専修大学に入学するのは七〇年。入学と同時に日本共産党・平和委員会系の「平和問題研究会」というサークルに入りました。学部は商学部。本当は商学部には行きたくなかった。珠算も、簿記もできず苦労しました。丸暗記。卒業前、簿記原理の単位をとるために、理由をつ

けて、一カ月休み、追試を受けさせてもらった。一〇問中八問は解けた。でも、珠算ができないから、先生に計算用紙を余分にもらって、筆算で何とかしのいだけれど時間切れ。しかたがないので、答案の裏に、「普通科出身で珠算ができませんが、時間があれば全問解く自信があります。この点考慮をお願いします。」と書いて出しました。そしたら「優」だった。授業にはほとんど出ていなかった。ほかにも落とされた人がいたけれど、私は留年せずに卒業できた。当時は、「わたしは沖縄出身だから英語はペラペラよ」と言えばそれで通用した。

―学生運動の経験はどうでしたか？

金城　「平和問題研究会」に入りましたが、三か月ほどでやめました。獄中から学校に戻ってきた、蜂起派のDさん（道場公基…羽山）からオルグがあった。沖縄出身ということで目を付けられた。「平和とは何か？」とかと議論をされました。世界同時革命やら、赤軍派の話やら色々な話をしましたが、そこで「沖縄は日本ではない」といわれた。「なんでかねー？」と思った。色々に説明してくれましたが、結局「いまのサークルをやめて、歴史研究会に来なさい」ということになった。次の日から、登校すると、すぐにつかまえられて、サークル室に連れて行かれます。共産党系の人たちは、「あの人たちと話をするな」と後ろから合図してきますが、蜂起派の人の話のほうがおもしろかった。いろいろ教えてもらった。ある時蜂起派の専従メンバーを紹介されブントの話などしてもらいました。

その当時、×××のK君も明大から来ていた。彼とはとてもハートがあうわけ。後で、彼が沖縄の現闘になって、海洋博闘争が終わったころ、「おれ、親の跡を継いで農業やるかもしれん」と打ち明けられたこともありました。結局八〇年代に入ってからのことになりますが、実家に戻り、農業をやることになりました。

―生田校舎だったのですか？

金城　神田校舎です。当時、三年生のころには神田校舎改築阻止闘争があった。生田校舎では、生協設立運動があった。両方の校舎を行ったり来たりで活動していました。そのうち蜂起派の人たちも卒業してしまうなどして、ブント系がいなくなってしまう。後はノンセクトの活動家が残った。卒業後は、すぐに沖縄に帰りました。七四年三月。新校舎ができたころにはもう帰ってきていました。

共産党への違和感と新左翼への傾斜

―人民救援会の形成―

金城　七〇年一一月の国政参加選挙のとき、瀬長亀次郎を当選させるために、日本各地から大勢の共産党系の活動家が派遣されてきた。私も、東京・代々木で訓示を受けたあと、沖縄・中部の事務所を拠点にして、国政参加選挙運動の応援をやっていた。その頃ちょうど、革マルや琉球独立党が、国政参加ボイコットの運動をやっていた。このボイコットの運動について「おかしいなあ」と関心をもちました。その頃、与儀公園あたりを歩いていると、学生たちが「国政参加選挙ボイコット」のデモもやっているし、琉球独立党の野底土南さんなどが演説をしたりしていた。興味があったので、第四インター系の集会も見に行ったりした。これを共産党の連中が見ていて、あとで東京に戻ってから「追い出される」ことになります。すぐ後（七〇年一二月）にコザ暴動があった。共産党は「コザ事件」という。それに対して私たちは学内でビラに「コザ暴動」と書いたので、共産党から批判された。こういうこともあって、共産党とは、政治的に合わなかった。国政参加ボイコットの運動もあって、共産党・民青とは縁を切りました。それからは新左翼系の人と行動を共にするようになりました。結果的には、それでよかった。後の時期に、布川さんたちの「モトシンカカランヌー」上映運動があったり、いろいろな集会があった。機会があればこれらにも参加した。「復帰」の直前、左派の活動家の交流は盛んにおこなわれていた。琉球独立党の集会に赤軍派が参加するというので見に行ったら、入口は私服で一杯で入れなかったとか。竹中労さん、平岡正明さん、足立正生さんなども来ていた時期です。

七四年に帰ってからはすぐに七五年・海洋博闘争の準備に入りました。弾圧や、不当逮捕が予測されたので、七五年には、人民救援会をつくりました。海洋博闘争で逮捕された人は一八人ぐらい。救援活動・差し入れで、各警察署を回りました。ひめゆり・白銀決起の沖解同や、DIC（Destruction is Creation 当時は毛沢東主義）などが弾圧されていた。松尾に沖縄舎をつくり、いろいろなグループの会議もここで行われていた。そのために、家宅捜査を受け、家主から追い出された。沖縄舎はベトナム・サイゴン解放を記念して、その日、七五年四月三〇日に作った。

当時、松永市民会議の古本市の残りがあって、それを安く譲ってもらい、学習塾と古本屋をやって沖縄舎を立ち上げた。

―関東沖解同（準）については、リーダー格であった島袋哲さんが『情況』に寄稿して下さっています。もともと広大の中核系のひとと聞いています。

金城　中核派のなかで意見の対立があり「同志会」というグループをつくった。これとブント系の人が結合して沖解同をつくった。そこで海洋博闘争に取り組むのだけれど沖縄に事務所がないから沖縄舎で会議をやることになる。松尾を追い出された後は開南に移った。やはり、学習塾と古本屋。また家宅捜査が入りましたが、その時は、家主が、そういうことに無関心、子供たちは労働組合員ということで長くいることができた。そのうち保育所をつくり手狭になってきましたので移転しました。

海洋博闘争をめぐっては、当初、人民救援会、沖解同、戦旗派、烽火派、統一共産同の共闘の枠組みができていましたが、後半になってこれが崩れてしまう。私は「沖縄自決」を認めるかどうかの対立があったと考えています。新左翼系の人たちは「国際主義」を標榜していましたが、私からは、実際には「左からの日本民族主義」とみえていました。常々その問題を言ってきましたし、今も言っています。日本の左翼は、この問題をもっとよく考えるべきです。

その後も繰り返し経験することですが、沖縄人は、日本の党派から抜けて行ってしまう。反CTS闘争でもその傾向が出ていました。政党や、労働組合の都合に振り回されるのではなく、住民の意思が尊重されなければならないこと。長い闘いのなかで、この考え方が根を下ろし、同時に、沖縄の民族意識のようなものが育っていった。崎原盛秀先生や、平良良昭さんは、その先駆者かもしれない。

平良良昭さんは、現在、立派な農業経営をしていると聞いています。彼は八〇年ごろに「いもの会」をつくり、自立経済の展望を提起しました。

金城　喜納昌吉さんは、七九年に私たちが、琉球処分一〇〇年の集会をやったときに参加していました。八〇年の

安保の集会にも。八七年の国体のときには、「うるま祭り」をやっていました。この時は、警備が厳しく、警察に追いかけられて、ほとんど参加できなかった。八七年秋の海邦国体では知花昌一さんが日の丸を引きずりおろして焼き捨てました。

―少しさかのぼります。七一年に沖青同の国会爆竹決起がありました。そのあと、有名な『ウチナーグチ裁判』になります。その後、逮捕された島添さんの解雇撤回闘争が続きます。在「本土」沖縄青年の支援グループとして「沖縄労働者の会」、あるいは「沖縄研究会」がありましたが、ほかに「ゆうなの会」というグループがありました。

金城　「ゆうなの会」は、文化による沖縄人の結集体でした。金武湾の反ＣＴＳ運動と深くかかわっていました。沖縄主義という印象の人が中心的でした。いまも何らかの形で運動にかかわっていると思います。このように、政治的、組織的な形では現れませんが、沖縄には、無数の自立・独立派の人々がいます。一人一党でしょう。

今の高江、辺野古がそうですが、金武湾の反ＣＴＳ闘争の人材が、大変活躍しています。西表、石垣などでも運動の骨格を担っています。だから、反ＣＴＳ闘争というのは、たしかに歴史的にとても重要な位置を占めていると言えます。

―運動の源流となったと同時に、沖縄の民族意識を培ったというように見えます。このあたりがなかなか日本人には解りづらいところです。七二年返還から八〇年代初めぐらいまでの間に、現在に至る沖縄の運動の原型が出てきているという印象をもちます。その間に「本土」・沖縄間の人の往来があり、それが一つの運動の流れともなってきた。

沖縄日雇労働組合の結成

―沖縄日雇労働組合そのものお話をうかがいます。結成の話から聞かせてください。

金城　結成は一九八七年六月二一日、嘉手納基地包囲の日。巨大な軍事基地包囲の日に産声を上げ旗を立てました。はじめての嘉手納基地包囲行動でした。その準備活動はその半年以上前、八六年一二月から始まっていました。当時は、首里の寄せ場に三五〇人ぐらいいました。全員にビラ入れをしました。「結ぶ会」も作って、一年後ぐらいから炊き出しも始めた。

―日本では、八二年に、山谷現闘委、釜共闘などの闘いを基礎として、日雇全協が結成されています。

金城　日本の、寄せ場労働者の運動には、大いに触発されました。労働者の交流もありました。とくに対金町戦では、沖縄からも応援に駆けつけました。しかし、沖日労は日雇全協に直接に加盟するというのではなく、「兄弟組織」であるという位置付けでした。沖縄人の民族的独自性を主張するためでした。金町戦支援に向かう釜日労の「勝利号」の、車中でこの議論をしたことを思い出します。釜、山谷の主だった活動者も、沖日労の立場を支持してくれました。

―沖日労結成以後の主な活動を教えてください。

金城　八〇年代後半でしたが、沖縄の建設、港湾の現場にまだ活気があった。当初五年ぐらいはずっと、賃上げをめぐる争議続きでした。六千円統一要求から始まって九千円統一要求へのぼりつめて行きました。当時釜の労働者の日当が、八千、九千円が最低で、上は一万三千円ぐらい。だから、沖縄の日雇の賃金はすごく低かった。半分ぐらい。要求して闘わなければほったらかし。同時に、企業と職安への日雇雇用保険加入、白手帳発行印紙要求、この闘いで、雇用保険・白手帳はかなり普及したはず。当初は、職安の所長も「白手帳」を知らなかった。釜ガ崎の職安から取り寄せなさいと所長にいいました。その頃有村産業には全港湾の支部がありましたが正規職員だけだった。それ以外の港湾の企業、業者には雇用保険はなかった。職安とタイアップしながら、白手帳を普及させた。その頃は、沖日労としての活動力、動員力もあった。とにかく、最初の三年から五年間は本当に忙しかった。

九〇年代後半ぐらいから、寄せ場もちぢんでやせてしまう。一〇〇～一五〇人ぐらいになって、さらに八〇人ぐらいになり、今や二〇人ぐらいでしょう。ホームレスになっていたり、そのほかは日本全国に流出したり、非正規で働いていたりです。携帯電話の普及などもあり、もちろん不景気ということもあった寄せ場として成り立たない。寄せ場での活動を続けていても相談事自体が減ってきてしまう。賃金不払いであるとかの問題がなくなったとは思えないが、これも携帯からの相談ということになる。現場闘争にならない。社会的な貧困はますます厳しくなっている現状です。山谷でも釜でもおなじでしょうが、「寄せ場」という労働市場の仕組みが役割をなくしてしまった。派遣だの、フリーターだのという雇用形態に変っている。むしろ生活保護、社会保障が重要視される時代になった。近年では毎年二〇人から、最高時で四七人、平均して三〇人程度の生活保護をとってきた。しかしこれも、最近ではキリスト教団体等、ＮＰＯの活動があって、寄せ場の人数がさらに減ってしまっている。それ自体悪いこととは言えないけれども、闘いとして成り立たなくなっている。下層の労働者の労働、生活実態が見えなくなってしまうのが困る。こういう条件の変化に見合った、フリーター労組や、合同労組のような活動が、今の沖縄には要求されていると感じている。もちろん社会保障の活動も必要。また、既存の労働組合が保守化して魅力がない。組合にいながら、組合活動から離れてしまうという人もたくさんいる。こういう労働者の仲間をどう抱え込み組織していくのか？　生活相談を含めた合同労組的な運動が今後必要になっていくのではないかと感じている。この一〇年で、沖縄社会がガラッと変わってきたという事実があります。日雇の運動も、一般労働者の、未組織の組織化ができるような運動に変化していかなければならない。この数年来の課題ですが、実際にこれを担う人材の問題がある。転換期を迎えている。人材も、活動の量も、そしてこの沖縄社会で民間未組織、下層の労働者を組織するという思想の質も要求される。

沖縄の闘う人々が直面する課題とは？

金城　沖縄では、前回の県知事選挙で、伊波洋一さんは負けたけれども、逆に保守側も、「基地容認」を言えないぐらいの沖縄の民衆運動の反基地運動の爆発がある。これに県政そのものが揺るがされている。仲井真さんも反基地を言わざるをえない。沖縄保守、さらにそれを支配するヤマト政府の動向に注目する必要がある。いずれ保守の側の化けの皮ははがれるでしょう。負けたけれども、伊波さん、革新の側の論点のほうが勝っている。

仮に米軍が追い出されても、今度は日本軍が入ってくるでしょう。だから、今も、反日、反自衛隊、反天皇の闘いが重要です。今後ますます重要になるでしょう。

沖縄経済は、ほとんどヤマト資本にやられています。地場産業、観光、交運すべてそうです。日本がすべて利益を

吸い上げている。資本主義のグローバリゼーションのなかで、沖縄の民族主義を踏まえながら、さらに一歩踏み越えて、世界のなかで沖縄がどういう位置にあるか、沖縄が、何を世界に対して提起できるかということを考える時期に入ったと思います。「琉球処分を問う会」での問題意識もこれです。私は沖縄の民族自決権を早くから主張してきたと思いますが、そのうえで国際化のなかでの沖縄のあり方を考えたい。

私は学生時代に東京にいたからわかるけれど、「あなたはどこの出身ですか？」といわれると、同じ大学の沖縄出身者はなかなか答えづらい。「南のほう」としか言わないわけ。「南のどこ？」といわれても答えきれない。私は「沖縄よ」と答えた。逆転した発想があったから、そんなふうにやり過ごしたけれど、七〇年代の沖縄出身者は、まだ、そういうこだわりをもっていたし、私自身もヤマトのなかで、事あるごとに特別視された。だから、卒業したら、早く沖縄に帰りたいと思ったし、実際帰って安堵した。帰ってすぐに海洋博闘争にかかわるけれども、左翼が教えてくれたというよりは、東京が教えてくれたのかもしれない。蜂起派が言っていた世界同時革命、「沖縄、日本ではない」、「沖縄は沖縄だ」というのも、新鮮に感じたのはそういう地理感覚だったかもしれない。だからパレスチナの運動にも連帯してきた。

―まとめに、今後の活動の展望についてうかがいます。

金城　六月一〇日の県議会選挙では、野党が勝ちました。沖縄の民衆の反基地の闘いの力でしょう。保守系、自民党でも、米軍基地には賛成できなくなった。風は、反基地の流れに吹いています。そこにオスプレイが配備されようとしている。尖閣列島をめぐっては、石原慎太郎や、橋下徹など右翼政治家、議員たちが集まって領有主張をやっている。いつ右翼が政変を起こしてもおかしくない。いま歴史は大きく動いている。共産党を含めてこれに沖縄の左翼は対応しきれていない。混乱期にある。これを克服して、沖縄の左翼の結集体を、党派をのりこえて作ることが求められている。八月にはオスプレイ配備反対の県民大会があります。一一月には『海づくり大会』が行われ、天皇も来るといいます。これに向かって学習会などを進め、左派結集の骨格をつくりたい。広がりと発展性をもって、次の世代へと運動を引き継いでいきた。

注．ボウ線は再録にあたってのものである。

玉城（たまぐすく）と摩文仁（まぶに）への誘い

於砦　奎

胸像

金城あゆみこと嶺井妙美

去る12月10日、金城実氏の制作した胸像が墓の脇に据えられた。故人が逝去し丸二年、来島する知人に誘われ運転手役も兼ねて同行。

南城市玉城字富里（なんじょうしたまぐすくあざふさと）、我が家から徒歩15分ほどの場所で、玉城（たまぐすく）の小学校、中学校、役所、公民館など公共施設の集まる辺り、ヤンバル山と呼ばれる崖線が北風を防ぐ場所。仲井真グスク脇の陸上競技場の駐車場から階段を上がっていくと、胸像は南西方を向いていた。

彼女の視線の先を見渡すと左手には太平洋そして摩文仁（まぶに）グスクから八重瀬（やえせ）グスクに連なる丘陵が右に伸びている。

伝統的な墓は斜面の大岩のへこみや陰を利用したものが多い。15世紀の琉球史に名を残す百十踏揚（ももとふみあがり）を含む、第一尚氏王統の門中墓もヤンバル山の大岩を背にしているのだが、故人の一門の墓は「百十踏揚の墓」が背にしている大岩を共有している。

玉城に生を受けた故人やその親族と、故人と縁を結んできた異郷の人々の間に自分がいる、そんな実感をもとに「ここから車で15分以内」という条件で小さな旅に誘おうと考えた。

観光立県のスローガンよろしき昨今の沖縄だが、旅行案内書に載る名所の脇にこそ、来訪者を待っている場所があると私は信じる。歴史の記憶を刻み、静かに待っている場所。

どうぞ少しの時間、お付き合いください。

【紹介する場所（近くの観光名所）】

☆摩文仁の湧水（県立平和記念資料館や平和の礎（いしじ）、黎明之塔や師範健児之塔）

☆糸数（いとかず）グスク（糸数アブチラガマ）

☆藪薩（やぶさつ）の浦原（うらばる）（新原（みいばる）ビーチや浜辺の茶屋）

☆第一尚氏王統の墓（玉城の奥武島（おうじま））

これらの場所はこちらに越すまで本州にしか住んだことのなかった私が、二十余年の間に沖縄の人々に誘われて知った場所であり、知人たちを案内してきた場所だ。

百数十年前の日本への併合の前まで使われていた間切（まぎり）・村（そん）という呼び方を使えば、以下紹介するのは我が家の南西方向、摩文仁間切摩文仁村、私の住む玉城間切當山（とうやま）村と隣の富里（ふさと）村、やや北の糸数（いちかじ）村、東方の百名（ひゃくな）村、となる。

【1】摩文仁の湧水と浜

45年6月に日本軍の組織的戦闘が終わったとされる沖縄戦。圧倒的戦力を持つ合衆国軍に対し、大日本帝國第32軍は本土戦準備の時間を稼ぐべく、首里城下に構築した地下陣地での徹底抗戦は避け、島南部の高摩文仁グスクの丘（標高80m）にあるガマ（鍾乳洞）に立て籠もった。100mに満たない、人がやっとすれ違える程の細い空間を短時間で整備した。司令官の牛島満らは45年6月22日（23日とも）に、徹底抗戦の命令を出して自死ししたが、それは洞窟内、あるいは丘上でと伝えられる。

沖縄以外の都道府県塔の慰霊塔は、多くはこの摩文仁（まぶに）の丘に林立している。

■平和記念資料館

75年6月11日開館した県立平和祈念資料館はこの丘の北側つまり海と反対側の麓にあった。7月、沖縄国際海洋博覧会の開会式に出席する日程で裕仁の子・明仁とその妻・美智子が2泊三日の旅程でやってきた。日本国の敗戦後、初の天皇一族の琉球沖縄入り。7月17日昼に那覇に到着、南部移動中に糸満の白銀堂付近で、またひめゆりの塔

前で抗議の標的とされたが、同日彼らはこの資料館も参観している。

二度目の沖縄県が誕生して3年後、県の援護課を中心に短期で作られた資料館展示は、日の丸を筆頭に牛島らの遺品・軍装や辞世の歌に始まり武器弾薬へと続くもので、住民の生々しい体験を伝える展示は皆無であった。開館直後に有志が団体を結成し、早速6月20日には知事と県議会宛の意見書を提出。以後さまざまに活動を展開し数年後の全面改装に至る。

現在の県立平和祈念資料館は2000年に新たに建て替えたもので、既に建っていた平和祈念堂（78年完成）と韓国人慰霊塔（75年8月）の南側、工業健児之塔（58年）の西隣にある。エレベータで資料館の展望塔に上り南を見渡すと、前方の太平洋の手前にある高みが摩文仁の丘で、手前の眼下に広がる「平和の礎」（95年）との間には小さな方形の芝地がある。公園管理用の芝刈り機や小型車が置かれていることも。これが旧資料館の跡地だ。新資料館との大きさの差も実感したい。

■太平洋に面する湧水

おすすめの場所はその旧資料館跡地のすぐ先だ。

展望塔を降り平和の礎を抜け、前方に見える岩の割れ目を通り抜けると風が変わる。小径を5分ほど降りていった波打ち際に、湧水のワシチガーがある。しっかりした靴を履いて訪れてほしい。

沖縄戦末期の45年6月、海上の合衆国軍の目前に追い詰められた人々が岩と樹木の中に身を隠し、崖周辺を右往左往していたとき、命をつないだ湧水の一つがこれ。

珊瑚石灰岩は水を通しやすい。台地に染み込んだ雨水は粘土層に阻まれると地下水脈となり、やがて湧き出るのである。この湧水が70年前に支えた生を想像する…私たちの耳には潮騒が響き、私たちの膚を海を渡る風がなでていく。

潮が強い時期の干潮時で天候が良ければ、東方の慶座（ぎぃぃざ）バンタの方へ歩んでいくことも可能であるが、くれぐれも潮の変化にはお気をつけて。

■もう一つの湧水

摩文仁の丘、標高約80mの高摩文仁グスクの西側下方の麓にある師範健児之塔はよく知られている。46年に建てられた腰丈ほどの珊瑚石灰岩の碑がそれで、付近の数基の大きな塔は後のもの。碑の建つ大岩の下の暗がりに降りていくと健児之納骨堂がある。これも見逃せない。

ここから海の方向に小径を辿って降りていくと、数分で大きな湧水、金武川（チンガー）に至る。珊瑚石灰岩の大岩の下に沁み出した水が溜まっている。前記のワシチガーより使い勝手の良さそうな構造。ここからさらに小径を行くとやや登ったあとに海の広がりが見えてくる。数分で辿り着くイノー（礁湖あるいは礁池）は穏やかで、亜熱帯の魚を何種類も見ることができるであろう。

普段は殆ど人気のない場所、摩文仁村の生活を何世代も支えてきた湧水と浜をゆっくりと感じたい。

【2】糸数グスクの見事な石積み

玉城間切の糸数村、現在の呼び方は南城市玉城字糸数。沖縄南部で最も高い場所で海抜約180mあり、台地が広がっている。今の集落はその台地の西側で、標高150m程の場所の大きな湧水が人々の生活を支えてきた。それほどの高所であっても豊かな水があるのは、珊瑚石灰岩層の広さ大きさのおかげだ。

■地下陣地と地上陣地

集落のはずれにアブチラガマはある。沖縄戦の戦跡としてのガマ（洞窟）の見学ができる場所として色々の意味でよく知られてきた場所である。県外から訪れる中高生の修学旅行で、また県内の小学校や各種団体の研修の場所として利用されている。地元のガイド団体を中心に市による管理がされていて、安全のための整備が進み資料室なども整えされ入場料をとる施設になっている。

44年、ガマを利用した地下陣地が構築されたのと並行して、歩いて5分ほどの台上には数百人数から千人規模の陣地施設が構築された。洞窟だけでなくその高台にも足を伸ばして欲しい。車で登れる坂がある。

往時、小国家が並立し、そのそれぞれが高台と港を持ち東アジアの、特に大陸との貿易を行っていた。糸数グスクを歩くと今でも青磁の欠片を拾うことがあるが、これも交易の、そして大陸との深い関係があったことの証拠だ。

■糸数グスクからの眺望

南部随一の高台だけに見事な眺望だ。簡易なものでも双眼鏡を持参したい。

北方やや東に勝連半島が望め、北西10㎞足らずに首里城の城壁を確認することができる。首里城は標高130mほど。左に視線を動かすと日航ホテルの上階部分が首里から那覇になだらかに降りていく尾根の向こうに頭を出している。さらに左に新都心の高層住宅、那覇のコンクリート群。県庁も確認できる。

東シナ海に浮かぶ慶良間の島々が山並みのように見える。また、台地の南を望める崖の縁からは島の南部を、太平洋を背景に見渡すことができる。手前の眼下には、15世紀に首里を追われた第一尚氏王統の人々が棲みかとした集落、玉城間切の富里（ふさと）や當山（とうやま）がある。郵便局、役所、小学校、中学校、体育館、公民館…。また、奥武島（おうじま）もよく見える。数十mの橋でこの島とつながっている人口千人ほどの島。

伝承では14世紀の始め頃に玉城按司（クマグスクアジ）が息子を糸数按司（イチカジアジ）に任じたとあるが、これらのグスクの成立は12世紀あるいは11世紀まで遡ることができるようだ。

台地に伸びる石積みを見渡せば、切石積みあり、野面積みあり…。高度な築城技術、種々の石材加工の技術によって支えられてきたこと、長期にわたって改築増築されてきたことが伺われる。

首里城など観光客向けの復元や整備がされてきたグスクと違い、ここでは残ったままの石積みや広大な敷地から往時を想像することができる。

講演会のお知らせ
木幡ますみ「福島の真実」（仮題）
飛田晋秀　「福島のすがた」（仮題）
日時 2016年1月17日（日）13時開場 13時30分開演
場所 光塾 渋谷区渋谷3-27-15光和ビル地下1階 JR新宿駅南口すぐ
主催 脱被ばく実現ネット　参加費 500円　先着順 50名
問い合わせ nijisaiban@gmail.com　又は岡田（090-8494-3856）

福島原発刑事訴訟支援団1.30発足のつどい
日時 2016年1月30日（土）
開会 14：00（開場13：30）　閉会16：30（予定）
会場 目黒区民センターホール 目黒区目黒2-4-36（目黒駅から徒歩10分）
主催：「福島原発刑事訴訟支援団」準備会
連絡先：080-5739-7279（福島原発告訴団）

■グスクの東に歴史を辿ると

伝承の玉城按司の居城であったタマグスクはここから東に約2㎞、さらに時代を遡ると、さらに東方の垣花グスクや琉球民族の発祥の地と称されるミントゥングスクがあり、その東に藪薩の浦原がある。

神が降りた島と言われる久高島から藪薩の浦原は8㎞ほど。「神」とは船団でやってきた人々のことであろう、久高は珊瑚礁の発達した干瀬のすぐ内側にある。そこから南西方向に続く、クマカ島、タマタ岩、アドチ島、アージ島と辿って、神すなわち人々は、この沖縄島にたどり着いたという。

この藪薩の浦原は、水堅浜、ヤハラヅカサ（海岸近くに半円形に並んだ岩々）、浜川御嶽（浜辺の湧水で拝みの場所）、潮花司などを含んだ広がりを指している。

【3】藪薩のヤハラヅカサ周辺

1989年の12月22日の朝だったと記憶している。初めての沖縄島滞在中。

民宿新原の宿泊客は私だけだった。朝食どき、主が言うには、宿の前の浜を左に歩いていくとずっと自然の浜が続いているがやがて大岩に阻まれる。その手前がヤハラヅカサ、すぐ近くの湧水からいつも清らかな水が流れている。辺りは琉球開闢の場所として、人々が昔から大切にしてきた、と。

食事前、私は2階建ての宿の屋上に上がって東の空を眺めていた。住み慣れた東京より遅い冬の日の出。数百メートル先に穏やかな白波が作る糸のような筋が左右に続くのが見える。

珊瑚礁が隆起してできた島。サンゴは今もその生命を継いで、静かにしかし着実に海面下で太陽光を浴びて命をつなぎ、炭酸カルシウムの骨格が浅瀬を作っている。波があたって白く砕ける。これを干瀬と呼ぶ。

旅の前からそれほどの知識は持っていた。

干瀬のこちら側がイノー（礁湖あるいは礁池）。魚、貝、海鼠や海星や蛸や海胆、目に見えない小さな生き物も含めて種々の生物が生を謳歌している。浜辺には、蟹、ヤドカリ、陸生の植物、名を知らぬ多くの虫や草。遥か昔から人々はそれらの生物に支えられてきた。

■浜を歩く

干瀬、イノー、砂浜の広がりが気になった私は、食事を終えてすぐ外へ。浜の砂はよく見ればほぼ全て珊瑚の欠片だ。少し混じるのが貝殻など。ときおりガラス片も見るが角が取れ色もくすんでいる。珊瑚の欠片に洗われ珊瑚の砂に馴染んでいる。

冬の朝の浜に人影はなかった。

砂が動いているかと思えばそれは小さなヤドカリ。自転車かバイクの轍にも見紛う足あとは大きなヤドカリのもの。10分ほど行くと浜はやや左に曲がる、陸側は数mの高さの大岩、振り返ると新原の浜は岩の陰、前には浜が続いている。百名の浜である。

■琉球発祥、稲作発祥

数分歩くと左側に続いていた木々の一部が開いている。自然の門。人が通うので開いているのだろう。

門を潜ると数段上った高さに平地が広がる、周りはサトウキビや野菜の畑、数十m程前方には10mくらいの高さだろうか、丘が立ちはだかった感じ。

数年後に知ったことだが、ここが稲作発祥に関わる祝毛とその周りの空間で、毎年初午の日（陰暦元日以降の初めての午の日）に、琉球民族の発祥の地と言われるミントゥングスクのある仲村渠の人々が、今も変わりなく神の田で田植えを行う。この神事の締めくくりを行う場所がここである。

来春のこの親田御願は、陰暦正月十一日（陽暦だと2016年2月18日）に行われるであろう。（付記：仲村渠以外の人々も神事に立ち会うことは可能、旅行者であっても。また、ここ以外にも稲作発祥に関わる場所はいくつかある。）

■地下水脈

海を背にして丘の方に進むと、農作業ための小径を横切る。更に進むと程なく丘の麓に着く。右側に小さな田、数段登れば左にも田。それらの田は受水走水の清らかな水で潤されている。丘に向かって左が受水で、その名の通り、膝より低い岩のうろの奥に流れ落ちる水を大地が受け取る音が響いている。右は走水、自然の岩の樋を水が走っている。

天からの恵みの雨は珊瑚石灰岩に染み込み、粘土層の上に大小の地下水脈を成す。そして人の領域に現れる。

■風葬・崖葬

崖の上方に続く小径が整っている。それは人々の生活する丘の上方から、聖なる場所を拝みに来て、また戻るための小径である。中途には分かれ道もあり、相当古くから続いていると思われる崖葬のあとも認められる。

琉球は風葬文化の続いた場所。

風にさらして遺体を骨にしていくという葬いの方法であるが、まずは動物たちがそれを助けるときく。主にオカヤドカリや蟹が働く。幼時は海で過ごすが成体が陸で生活する生き物たち。

■ヤハラヅカサとは

さて浜に戻り東方に進むとコンクリート製の杭のようなものが、砂に立って私を待っていた。根元は水と砂に洗われて細くなっている。高さは人の胸よりやや低い。難しい

辺野古の海を埋め立てるな！1.24 緊急デモ

―沖縄県知事の埋め立て承認取消を支持します―

2016年1月24日(日) 新宿アルタ前14：00集合・宣伝

15：00デモ出発

主催：辺野古への基地建設を許さない実行委員会

連絡先：沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック TEL:090-3910-4140

共産主義者協議会

プロレタリア（無産社）の共同政治新聞

『赤いプロレタリア』

2月に発行　乞うご期待！

2016・2・11 反「紀元節」行動に参加を！

講師　須永守（近現代史研究）「戦争国家と天皇の『慰霊』」

日時　2016年2月11日(木) 13時15分開場※集会後デモ

場所　神宮前隠田区民会館2F 地下鉄明治神宮駅前/JR原宿駅下車

2・11反「紀元節」行動実行委員会（準）

連絡先●東京都千代田区神田淡路町1-21-7-2A　淡路町事務所気付

電話●090-3438-0263 振替●00110-3-4429［ゴメンだ！共同行動］

漢字が幾つか縦に彫られていた。後に観光案内の本を見て、「ヤハラヅカサ」が近くにあることを示していると知る。東方遥か彼方にあると言われる大東島、さらに遥かなニライカナイに祈りや思いを届けるための場所だとか。海に向かって左手に細い島影が見える。神の島とも呼ばれる久高島である。

手前、波打ち際から数mほど先に岩が半円形に並んでいるのがわかる。満潮時には海面下に没することもあるが、そんなときでもよく見れば、黒い岩々があるのが確認できる。

ヤハラヅカサを示す杭は後に根元で折れてしまった。侵食が進んだためだろう。しばらくして誰かが気を利かせたらしく、流木を立てた。さらに月日は流れ、今では「ヤハラヅカサ」のカタカナを彫り込んだ縦長の石が立っているのだが、円弧を為して並んでいる岩の上に建てられたもの。地元の教育委員会が作った。満潮時でも、この石はめったに水面に没しない。

祈る人々をよく見かける。祈りの姿は様々だ。琉球の伝統に従っている人もいるし、故人の思い思いの方法で祈る人もいる。ここは、人間は祈り続ける存在であるとと認識する場所でもある。

■浜へ流れる湧水

海を見つめたあとは陸も見よう。ゆったりと眺めていると、高さ数mの大きな岩塊が草や樹木を載せていくつもそこにあると気づく。岩の隙間には自然石を並べた階段がある。登った先は浜川御嶽。文字通り浜辺の湧水で、ここにも祈る人をよく見る。

この階段は十数年前に手作りで出来上がったものだ。神ごとを行う人、付近に住む人、その他この場所に縁のある人がいろいろと相談しながら創ったものだ。その斜面はかつて人に手を加えられ、その後放置されたため、やや荒れた景色になっていた。この人々の相談の末、なるべく自然に近い形、無理のない形態にして長らく残せる工夫がされて、こうなった。

ここ百名の浜は現代の沖縄島には珍しく人工的なものは殆ど無い。湧水が海に注ぐ道筋の変化や、浜辺に打ち寄せる砂の量の変化などがあるものの、今も古い姿をよく伝えている。

【4】第一尚氏王統に関係する墓

私はここ十数年、恵まれた場所に住んできたと感じる。東方に車を走らせると15分弱で斎場御嶽に着く。またその少し先に安座真集落があり安座真港からは久高島に渡る一日5往復の船便がある。

西に15分弱で摩文仁に着く。言うまでもなく沖縄戦に関わる数々の史跡があり、更に数分行けば魂魄の塔、ひめゆりの塔や資料館、その他、陸軍病院や野戦病院に関わる戦跡などが多数ある。

北西に15分以内で南風原南インターチェンジに着く。そこから空港自動車道に乗れば、那覇空港まではうちから30分。反対方向に行くと辺野古のキャンプ・シュワブまではうちから一時間と少しだ。

■尚泰久王の墓

さて、玉城の富里や隣接する當山は第一尚氏王統の末裔とも言われる人々が住んだ場所である。大雑把に言うと、第二尚氏王統の始まり、すなわち尚円が権力を握った際に首里周辺から離れていった人々ということである。

第一尚氏6代目の王、尚泰久の墓はバス通りでもある国道331号線に面した農協の向かい、国道331の脇に階段ができていて、建物で言えば5階建ての岩の2階くらいの高さにある。

ここは彼の長男、安次富金橋らの墓でもある。

安次富金橋の墓を継いでいった子孫が代々の墓としていたが、琉球王国が滅ぼされ日本国に併合された後の1908年になって、他の場所を転々としてきていた尚泰久の遺骨を運んできたのだ。

小さな流れを挟んだ西側にも植物を載せた岩があり、安次富グスクで安次富金橋が一時住んだ場所。その西に道路を挟んだところが大川グスクで尚泰久の次男の三葉多武喜が住んだという。

徒歩で数分ほどの所に尚泰久の兄に当たる尚布里の墓がある。これもバスの通り道になっている県道48号線沿いでわかりやすい。階段で上がる小さい岩山が墓である。布里は王権をめぐって甥の志魯と争った人物。

■7代続いた第一尚氏王統

第一尚氏王統の始まりも記しておこう。琉球の三山分立時代に中山王となったのち、15世紀初期に南山と北山それぞれを倒し統一王朝体制を築いたのが第二代目の尚巴志王である。彼は自分の父・尚思紹初代とした。尚巴志が生まれたのは玉城の親慶原にある天地門ガマであるとも言われている。

「第一」尚氏とは後から付けられた呼び名だ。第6代の尚泰久王の時代に、勝連グスクを拠点とした阿麻和利と中グスクの護佐丸の権力抗争が起こる。その後、尚泰久の片腕であったとも言われる人物が権力を奪い、7代目尚徳で王統が終わる。第二尚氏の初代は尚円王、継続して首里城を拠点とした。第二尚氏王統はいわゆる「琉球処分」まで19代続く。

■百十踏揚をめぐる4人の男

第一尚氏王統の末期の女性としてよく話題に登るのが百十踏揚だ。父は6代王目の国王の尚泰久、母はその尚泰久王の「忠臣」だったと言い伝えられる護佐丸の娘。さらに百十踏揚の夫が阿麻和利だったのである。護佐丸、阿麻和利、百十踏揚らは繰り返し物語や芝居のモデルにされてきた。

概して阿麻和利は逆賊で護佐丸は忠臣と言われることが多かったが、違った見方もある。近年の劇では阿麻和利を地域の英雄として賛美した。

また、百十踏揚は大変な美女だったとも言い伝えられる。そして百十踏揚の金の簪と伝えられるものが富里にある。これを守り伝えている屋敷には近年描かれた百十踏揚の肖像画があり、これはたしかに美しい。画家が描いた際のモデルは、後にその画家と結ばれたとも聞いている。

いずれにしても彼女に関わる話に負の評価を聞かない。百十踏揚は、父親である護佐丸を夫の阿麻和利に殺され、その後で阿麻和利を討った大城賢勇は百十踏揚を妻としたと伝えられているが、そこにどのような権謀術作が渦巻いていて、彼女はその中をどのように生きたのか、生かされたのか。いずれにせよ現代を生きる私たちの想像力を刺激する人物と言えよう。

「百十踏揚の墓」からも太平洋は望めるが、そこから丘の上に続くウザハ坂を登ることをお薦めしたい。5分とかからず丘上に至る。台上には広々とした公園があり、ミントゥングスク、玉城グスク、糸数グスクを繋ぐ道の半ばにあるので、グスクロード公園という。

太平洋の大海原を背景に、摩文仁の丘がよく見える。

豊島文化社
住所変りました
〒171-0031 東京都豊島区目白2-18-15
目白コンコルド101
TEL&FAX 03-6328-9457